

BOOK REVIEW

発達障害の作業療法 基礎編/実践編 第2版

2001年に公刊された『発達障害と作業療法』を大幅に改訂した『発達障害の作業療法 第2版』がこのたび上梓された。著者である岩崎清隆氏の広範な学識と卓越した臨床実践を知る者として、著者のこれまでの歩みの集大成とも言える本書が公刊されたことは喜びに堪えない。

本書の内容について述べる前に、第2版が出版された時期について触れておくと、本書が出版された2015年は、障害者総合支援法と障害者虐待防止法の制定(2012)、障害者差別解消法の制定(2013)、国連の障害者権利条約の批准(2014)など、障害支援に向けての法整備と新たな動きが急速に進みつつある時期である。

こうした障害支援の大きな流れに基づいて改訂された本書には、発達障害の子どもたちとその家族の切実なニーズに応え、それらの人たちの願い・悩み・苦しみと真摯に寄り添っていこうとする著者の深い思いと、それを実現するための臨床実践の具体的な道筋が明示されている。こうした著者の思いと実践への高い志は、書名の助詞が「と」から「の」へと変更されたことに、象徴的に表れていると言えるだろう。

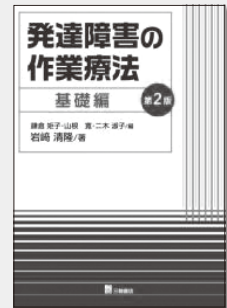
本書を一読して感じるのは、「何とトータルな内容であるか!」ということである。ここで言う「トータル」には3つの意味がある。第1は、本書で述べられている分野のトータルさで、著者が論じる発達障害の作業療法の背景には、哲学、心理学、教育学などの学問分野に関する深い学識が込められており、また、各章の内容においても歴史、制度、理念、保護者の心理、子どもの発達過程など、発達障害の作業療法を実践するうえで不可欠な基礎知識が網羅されている。私の専門である教育学や心理学の数ある書を見ても、子どもの発達支援について、これほどにトータルで系統的内容

を示した著作は類例がないように思う。

第2は、本書全体を通じて、「まず人間の全体を見る」という姿勢が貫かれていることである。専門職に就く者はその専門的な知識ゆえに、えてして個々の機能に焦点を当てがちであるが、人の持つさまざまな機能は有機的に関連し合って1つの全体を構成しているものであり、治療・支援にあたってはまず、生活環境や社会環境を含めたクライアントの全体を見なければならないというのが、本書を通じて著者が最も言いたかったことの1つであろう。こうした著者のトータルな人間の見方には、作業療法の豊富な臨床経験に加えて、米国やタイ、ネパールでのさまざまな異文化体験が反映されているように思う。

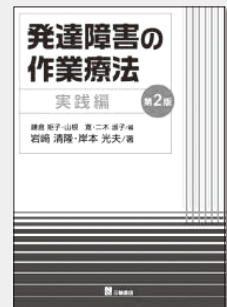
そして第3に、本書の最大の特色は、発達障害の作業療法において最も重要なポイントとなる「作業」と「発達」の関連をトータルかつ明快に論じている点にある。子どもは「発達する存在」であり、作業療法、心理療法、学校教育のいずれにおいても、発達に関する知識と理解なくして子どもの臨床は成立しない。「基礎編」の付録「発達の筒」にあるように、子どもの発達の道筋を常に視野に入れながら、今、目の前にいる子どもが発達のどの段階・様相にあるのかを念頭において作業の意味を考え、支援のプログラムを立案するうえで、本書ほど明確な指針を示してくれる書物はないと言える。

本書は、これから発達障害の作業療法を学ぶ人、今その仕事を始めた人を主な対象に書かれているが、作業療法に携わる人たちにとどまらず、教育や心理の領域で子どもの発達支援にかかわるすべての人々に強く勧めたい本である。筆者もまた本書を常に手元におき、繰り返し熟読したいと思っている。岩崎先生、本当にご苦勞様でした。



●岩崎清隆=著

(B5判/292頁/3,600円+税/三輪書店/2015年)



●岩崎清隆、他=著

(B5判/392頁/3,800円+税/三輪書店/2015年)

評者

花熊 暁

愛媛大学教育学部特別支援教育講座 教授、言語聴覚士